

# メルロ＝ポンティ『シーニュ』における他者の問題

山下 尚一

本論文の目的は、メルロ＝ポンティの『シーニュ』<sup>1</sup>における他者の問題を考察することである。メルロ＝ポンティは他者について考察するとき、他者あるいは自己という観念から出発するのではなく、身体概念から出発している。そして他者それ自体を把握しようとするよりも、自己が他者となり、他者が自己となるような関係を探ろうとする。そのような独特の関係が繰り広げられるのは、まさしく身体においてなのである。

『シーニュ』という著作は、メルロ＝ポンティの思想のなかで中期の論文集とされているが、正確に位置づけるのはむずかしい。『シーニュ』には論文だけではなく、政治にかんする発言や、社会や文学をめぐる自由な意見といったものもおさまられている。これらの論文と発言の発表年を見ても、1947年から1960年にまでわたっており、中期というにはいささか長い期間におよんでいる。それにくわえて、論文と発言のテーマもさまざまである。論文のなかには、言語論、社会学・人類学と哲学の関係、フッサール論やベルクソン論などがある。また発言においては、同時代の政治状況（マルクス主義とスターリン体制の関係、インドシナ植民地主義の問題、アルジェリア独立運動の問題）や、三面記事を読むことの意義、クロードルの文学の創造性などについて言及されている。

このように『シーニュ』の特徴を一言で要約するのは困難であるけれども、著作全体をとおして散見されるのが、他者にかんする興味深い記述である。そこで本論文では、『シーニュ』のとくに後半部分における他者の問題を取り上げることで、この著作のひとつの傾向を浮かび上がらせてみたい。

第一節では、メルロ＝ポンティがほかの思想家

たちの文章を読むときの姿勢について確認する。第二節では、フッサール論を取り上げて、身体をめぐる自己と他者の関係について考察する。第三節では、メルロ＝ポンティの記述を引用しながら、自己と他者のあいだで意味がどのように生まれるのかということを考える。第四節では、そうした意味が言葉や身ぶりの端にあらわれるということを見ていく。

## 1. 『シーニュ』の他者

メルロ＝ポンティは『シーニュ』の後半部分において、フッサールやベルクソン、モンテーニュやマキアヴェリなどを取り上げており、ほかにもさまざまな思想家の文章を引用しながら論じている。その意味で『シーニュ』においてなされているのは、メルロ＝ポンティがほかの思想家たちの文章を理解しようとする作業であり、そこから出発して自分なりの思想を組み上げようとする作業である。つまりメルロ＝ポンティは、他人の文章と出会い、そこに含まれている他人の思想をとらえようとする。そして、彼はそれを肯定したり否定したり、カッコに入れたり別の思想に結びつけたりする。私たちは『シーニュ』をとおして、メルロ＝ポンティが他人の文章や他人の思考にかかわる仕方を見ることになる。

とはいえ、ほかの人の文章や思考を理解しつくすことはできない。メルロ＝ポンティ自身がいのように、「一時間で書かれたその一ページは、無数の注釈書によっても汲みつくしえないものである」(S, 236/(2)51)。あるページの文章や思考を汲みつくすことができないのは、そこにあるひとつの単語がほかの単語へと組み合わせさせて、単語

を乗り越えた何ものかに変貌するからであり、さらに、そこに何らかの意味を読み取るべく読者にせまるからである。それはまるで、ひとつの身ぶりがほかの身ぶりへと組み合わさって、身ぶりを乗り越えた何ものかに変貌するかのようであり、そこに喜びとか怒りといった意味を読み取るべく相手にせまるかのようである。それゆえ、メルロ＝ポンティはフッサールの文章を読解するけれども、彼が述べていることはフッサールのものとは一致しないかもしれず、とはいえフッサールという他人の思想に入り込むことによってこそ、彼は彼自身の言葉へと導かれている。

私が聞いているときや読んでいるとき、言葉がいつも私のうちで、あらかじめ存在している意味にぴったり触れるとはかぎらない。言葉は私を私の考えの外に連れ出す異常な力をもっているし、言葉は私の私的世界のうちに裂け目をつくり、そこをとって他人の考えが侵入してくる。[……] 何といっても物質の塊にすぎない私の身体が、その彼方を目指すさまざまな身ぶりに凝集するのと同じように、言語の個々の単語は、ひとつひとつ取り上げられれば惰性的な記号にすぎず、それには漠然とした観念ないし陳腐な観念が対応しているにすぎないのだが、話すというはたつきがそれらをただひとつの全体にまで結び合わせる時には、それが突然ひとつの意味でふくれ上がり、その意味が他人へとあふれ出していく。(S, 298/(2)142-143)

他人の言葉を理解するということは、複数の記号のあいだに汲みつくしがたいものを発見することであり、それを他人のものでありつつも自分のものにしてしまうことである。メルロ＝ポンティがフッサールを論じる時、彼はフッサールの言葉のなかに自分の考えを探しており、また自分の考えのなかにフッサールの言葉を見出している。それと同じように、私たちがメルロ＝ポンティを

論じるときにも、私たちはメルロ＝ポンティの言葉のなかに私たちの考えを探しており、私たちの考えのなかにメルロ＝ポンティの言葉を見出している。そうすると、メルロ＝ポンティとフッサールは、そして私たちとメルロ＝ポンティは、重なりつつもずれているだろう。私たちがメルロ＝ポンティを読むということは、そこから見えてくるのが彼の考えなのか自分の考えなのか、ほとんど区別がつかなくなるところまで進んでいき、それでもあとから見ると、メルロ＝ポンティ固有のスタイルと自分固有のスタイルが分離されてはっきりと浮かび上がるようにすることである。そのとき私たちは、彼が使用するシーニュをひとつずつ了解するというよりも、それらのシーニュが連結しながらひとつの意味となっていくような彼の文章の特有の場面に立ち会うことになる。

## 2. 他者は身体からあらわれる

ここでは、フッサールをあつかった論文である「哲学者とその影」を取り上げ、他者の存在がどのように論じられているのかということを見ていこう。注目すべきことにメルロ＝ポンティは、他者の問題を考えるのにあたり、自己という概念からも、他者という概念からも出発しない。メルロ＝ポンティが考察の出発点とするのは、身体である。

メルロ＝ポンティは『知覚の現象学』(1945年)においても、他者について論じていた。そこで他者の存在を基礎づけていたのは、自己の自己自身への関係であった。「私の主観性と私の他者への超越とを同時に基礎づけている中心的現象は、私が私自身に与えられているというまさにその点にある」<sup>2</sup>。それに対して、『シーニュ』所収の論文「哲学者とその影」(1959年)においては、他者というものを成り立たせるのは、自己の自己自身への関係というよりも、身体<sup>シニ</sup>の身体自身への関係である。私たちはここに、前期の思想から展開した理論を見て取ることができる。私の身体が私の身体そのものに与えられているということは、私

の精神を経由せずにもみずから自身に向かうことができるということである。

私の身体と私とのあいだには、機会的因果性のさまざまな規則的対応関係以上の何があるのだろうか。そこにあるのは、私の身体の手自身にかんする関係であって、これが私の身体を私と物とのきずな (*vinculum*) たらしめているのである。たとえば私の右手が私の左手に触れるとき、私は左手を「物理的な物」として感じるが、しかしちょうどそのとき、私がその気になれば、私の左手もまた私の右手を感じはじめる、〔フッサールの言葉をつかえば、〕それが身体になり、それが感じる (*es wird Leib, es empfindet*) という異様な出来事が起こるのだ。物理的な物が生気を帯びる——もっと正確に言えば、それは依然としてそれがあつたとおりのものであって、その出来事によってそれが豊かにされるわけではないのだが、ある探査能力がそこに着地し、住み着きにくるのである。したがって、私はさわりつつある私にさわり、私の身体が「一種の反省」を遂行する。(S, 210/(2)14-15)

もちろん、私の右手が左手を感じることに、私の左手が右手を感じることは、厳密に同時には起こりえず、いつのときにも一方の手が他方の手を感じるということしか起こらない。だが「私がその気になれば」、感じる手と感じられる手の関係を逆転させることができる。それまで私の左手は、感じられるものとしての身体だったけれども、あるとき、そのものであるがままにそのものであることを乗り越えて、感じるものとしての身体となったわけである。別のいい方をすれば、それまで私の左手は、他なるものだったけれども、あるとき、他でありながらも他であることを乗り越えて、自己なるものとなったわけである。このように、ただひとつの身体の内には、ある種のずれが生じてくる。そのずれによって、私と他者、私と事物、こととそこ、近くと遠くという区別が生まれる。

それらは、同じであると同時に異なるものであって、メルロ＝ポンティによれば、「ヴァリエーションのシステム」をなしている。

私の身体の絶対的ここと感覚しうる物の「そこ」、近くと遠く、私が私の感覚しうるものについてなす経験と他人が彼のそれについてなすにちがいない経験、これらは「もとのもの」と「変化したもの」の関係にあるが、それは、そこが希薄になり弱められたここであり、他者が外に投影された自我であるからなのではなく、身体的実存の奇跡にしたがえば、「ここ」、「近く」、「私」とともに、それらの「ヴァリエーション」のシステムもそこに敷設されているからなのである。絶対的現前において生きられているそれぞれの「ここ」、それぞれの近い物、それぞれの私は、みずからを越えて、私から見ればそれらと両立不可能ではあるが、やはり同じ瞬間でほかのところで絶対的現前において生きられているあらゆるほかの「ここ」、ほかの近い物、ほかの私について証言しているのだ。(S, 221-222/(2)29-30)

ひとつの身体の内にはへだたりがひそんでおり、そのへだたりからこそ、私と他者、私と事物、こととそこが、同じであるとともにちがうものとして浮かび上がる<sup>3</sup>。このとき他者は、私という存在のあとに形成されるのではなく、私という存在とまったく同時に形成される。そして他者は、私ではないもの、私と対立するものとして形成されるのではなく、私のようなもの、私とよく似ているもの、とはいえ私とは別のところにいるものとして形成される。このように他者という存在は、身体と身体それ自体への関係からあらわれるのであり、しかも自己があらわれるまさにそのときにあらわれ、自己と同じでありながら異なるものとしてあらわれる。

### 3. 他者である自己に浮かんでくる意味

私たちはここで、『シーニュ』におけるメルロ＝ポンティのいくつかの記述を抜き出し、他人があらわれる場面を考えてみよう。他者が私の前にあらわれてくるとき、私はそこに何らかの意味を見出す。それはたとえば、相手に対して怒りや愛を感じることもだったり、相手とのあいだに性的感情や友情を抱くことだったりする。さらには、雑報をとおして世界を読むことだったり、政治において権力関係を形成することだったりする。そのように私が意味を見出すということは、私が身体性において他人と結びつくということであり、それ以上に、他人であるような私自身を認めるということ、他人のいるそこに私自身がいるのを認めるということである。

他人というものもまたそこに存在している〔……〕。といっても彼らは、はじめから精神として存在するのでもなければ、「心的現象」として存在するのでもなく、たとえば私たちが怒りや愛において出会うようなものとして、つまり何の考えも起こらないうちに私たちのほうが応答してしまうような顔、身ぶり、言葉として存在し——しばしば私たちは、他人の言葉を、それが私たちに届かないうちに、しかもそれをはっきり理解したときと同じくらい確実に、あるいはそれ以上に確実に、そっくりそのまま他人にいい返すことさえあるくらいだ——、それぞれの人が他人を受胎し、また他人によって自分の身体のうちを確認されながら存在するのだ。(S, 228/(2)38)

他人は透明な精神としてではなく、表情をそなえた顔や身ぶりや言葉として、すなわちある傾向としての構えや身のこなしとして私たちにせまってくる。その人固有の表情と傾向は、その人の身体にありながら、そこからあふれ出て私たちの身体の中に入り込む。私は私の身体をもって他人

の身体を生きるのであり、それとともに他人の身体をもって私の身体を生きるのでもあって、このようにしてこそ私は他人のいわんとする意味を把握できる。他人の身ぶりや言葉をとおり抜けながら、どうしてもその表情とその傾向を受け入れることができず、反発することしかできないという場合、そこには怒りという意味が浮かび上がるかもしれない。また、他人の構えや身のこなしや話し方を受け入れて、その表情とその傾向に執着してしまい、さらに受け止めてまるごと自分のものにしたと思うという場合、そこには愛という意味が浮かび上がるかもしれない。このとき、私と他人のあいだにヴァリアントのシステムが作動しはじめ、何らかの意味を差し出してくる。

興味深いことに、メルロ＝ポンティはそのように意味があらわれるさい、私と他人がほとんど入れ替わるということを述べている。たとえば、フロイトの性の理論における自己と他者の関係について見てみよう。メルロ＝ポンティによれば、性的なものは私たちが他人との関係を生きる生き方であり、それも、私たちは肉体なのだから、その肉体的な生き方である。とはいえ「性とは他人との関係であって、たんなるほかの身体との関係ではないのだから、性は他人と私とのあいだに投影と取り込みの循環的システムを張りめぐらし、反映する反映と反映された反映との無限の系列にあかりをつけ、私が他人であり他人が私自身であるといった事態を引き起こす」ということになり、結局フロイトの学説が提示している考えとは、人はそれぞれ「身体となることによって自分自身にも与えられるが他人にも与えられており、比類のないものでありながらやはりその生まれもった秘密ははぎ取られて、自分に似たものと向かい合っている」ということである(S, 292/(2)135)。性的な魅力を感じるということは、他人の身体のあるそこを、いちはやく自分のいるここに重ね合わせたいと思うことであろうし、他人の身体が自分の身体へと住み着いて、自分を内側から揺り動かしているかのように思うことであろう。人間は「ほかの人と並ぶひとりの人であり、他人とはほ

かの自分自身である」(S, 293/(2)136)。だからこそ私と他人のあいだには性的なものという意味が湧き起こってくる。

また、友情における自己と他者の関係について考えてみよう。メルロ＝ポンティはモンテーニュの『エッセー』を取り上げながら、モンテーニュとラ・ボエシとのあいだの友情にかんして述べている。モンテーニュの文章から見て取れるのは、彼がラ・ボエシという他者をとおしてこそ自己自身について知ることができたということである。モンテーニュは、「ラ・ボエシが彼を知っている以上に自分自身をよく知っているとは考えなかったし、彼はラ・ボエシの目で見られながら生きていた」(S, 262/(2)88)。彼は『エッセー』において自分自身を考察するが、それは、他人であるラ・ボエシが自分を知っていたのと同じように、自分自身を知ろうとして考察するわけである。「結局モンテーニュは、いくつの場合において、拒もうという気持ちすら起こさせない人々や事物を自分の外に認めたわけであり、それというのも、こうした人々はいわば外にある自分の自由の記章だったからだし、彼らを愛することで彼は自分自身であり、彼らを自分のなかに見出すように、彼らのなかに自分自身を見出していったからだ」(S, 262/(2)89)。私がだれかと友人であるということは、その友人が私を見たり私に話しかけたりする仕方から、私が私自身を自由に出現させていくことである。ときに私は、友人のまなざしの動きや言葉のリズムから、そのいわんとすることを先取りし、そこに私自身のいわんとするを感じ取ることができる。こうした二人のスタイルが交差するところにおいて、友情という意味が芽生えてくる<sup>4</sup>。

さらに、新聞の三面記事を読むという行為についても、自己と他者の関係が問題になる。この場合一見すると、私は人々の生活を一方的に見るだけであり、私の生活が人々に見られるということはないので、私と他人が入れ替わることはないように見える。しかし実際のところ、私は人々の生活を読むことで私自身の生活を読むのであって、

私と他人の混じり合うところにひとつの意味を拾い上げる。ある三面記事によれば、ある人は一部屋に四人で暮らし、朝五時に起きて子どもたちを学校に連れていき、バスと地下鉄に長時間揺られてパリに出勤し、夜八時に帰宅して買い物と夕飯をすませる、また翌日も同じことをはじめ、そうして何年かすると同じ生活ができなくなる、このような細かなことが書かれるかもしれない。だからといって、「本物の雑報は人生のごみくずなのではなく、記号、記章、呼びかけである」(S, 390/(2)248)。私は他人の生きるところを眺めながら、まさしく私自身の生きるところを眺める。他人の様子がまるでもうひとりの私の様子を写したもののように感じられるからこそ、私は記事に関心をもつ。「雑報の楽しみ、それは見ることへの欲望であり、見るとは、顔の一本のしわのなかに、私たちの世界に似たひとつの世界をまるごと見抜くことである」(S, 388/(2)245)。三面記事を読むということは、自分の生活のただなかに他人の生活を入り込ませることであり、自分の生きる仕方と他人の生きる仕方がすり替わるところへと進むことである。そうして記事の片隅には、幸福や不幸だったり、喜びや悲しみだったりといった、さまざまな意味が感じられるようになる。

最後に、政治生活における自己と他者の関係について取り上げよう。メルロ＝ポンティはマキアヴェリの政治理論を解釈しつつ、私と他人が形成するひとつの回路について述べている。メルロ＝ポンティによると、マキアヴェリの独創的な考えというのは、私が他人をおそれるまさにその瞬間に他人が私をおそれるようになること、私が他人におそれをいだかせるとしても、その他人のおそれのなかで自分のおそれを生きるようになること、こうしたことを見出したところにある。「要するに、顔というものは影や光や色にすぎないのだが、体刑執行人は、その顔が何となくゆがんだということで、不思議にもくつろぎを感じる。それはつまり、他人の不安が彼の不安に取って代わったということである。また、文というものは言表でしかなく、意味作用の集合でしかないし、その意味作用は原則として、各自が自分自身に対してもつ

独特の味わいほどに価値がありうるものではない。にもかかわらず、残酷な人間は、その犠牲者が自分の敗北を告白するとき、その言葉をとおして、もうひとつの生命が脈打つを感じ、もうひとりの自分自身の前にいるような気がする」(S, 268/(2)101-102)。私は他人の顔や他人の言葉のうちに、自分自身のおそれを感じ取る。そこには、他人のものでありながら自分のものでもあるようなおそれがあり、そのおそれによって権力関係がもたらされる。このような自己と他者のあいだのシステムをコントロールすることこそ、マキアヴェリの政治理論の目標である。「権力は、自分と他人との関係を掌握することによって、人と人とのあいだの障害を乗り越えて、私たちの諸関係を何らかのかたちで透明ならしめる——それはあたかも、人間は一種の距離のなかでしか近づきえないというふうなものである」(S, 275/(2)111)。そうして、私の表情と他人の表情、私の言葉と他人の言葉が距離をもちつつ交錯するとき、そこに主人とか臣民とかいった政治的な意味が発生してくる<sup>5</sup>。

#### 4. 意味は端にあらわれる

以上に見たように、私にとって他者があらわれるとき、他者は別の私自身のようなもの、身体をめぐって私とほとんど交換できるようなものとなり、そこにひとつの意味が浮かび上がる。注目すべきことに、この意味が出現してくるところは、顔や身ぶりや言葉の中心においてではなく、それらの端においてである。

私がある人を好ましく思うのは、その人を真正面からじっと見たときの静止したイメージに魅力を感じるからではなく、その人の言葉から推測される明晰判明な心的内容に引きつけられるからでもない。私はむしろ、その人が思いがけず笑うときの目の端に起きる変化を好ましく思い、ふと顔をうしろにふり向けるときの髪の毛の先のちょっとした揺れを好ましく思う。あるいは、会話のなかでたまたま出てきた単語におかれたわずかなアクセ

ントに魅力を感じる。そうしたささいなところからこそ、その人らしさというものが浮かび上がり、その人のまさに精神ともいべきものが見出される。「精神はもはやそれだけ離れてあるのではなく、自然発生によるかのように、数々の身ぶりの端に、数々の単語の端に芽生えてくる」(S, 298/(2)143)。それと同じように、ある人が話したり書いたりする言葉は、その内部、その中心のところに意味が存在するわけではなく、そのへり、その端のところに意味が立ち上がってくる<sup>6</sup>。それゆえ私たちは、「諸記号の端に生まれてくるこうした意味、諸部分におけるこうした全体の切迫」(S, 51/(1)60)に注目しなければならない。

メルロ＝ポンティによると、端やへりに湧出する意味をとらえることができるのは、明瞭な意識、はっきりした知覚ではない。むしろそれはフロイトのいう無意識、あるいは「両義的知覚」と呼べるものであって、「この意識はその対象のかたわらをかすめて、それを定立しようとしているときにはそれを避け、それを認めるというよりもむしろ、目の見えない人が障害物に対するようにそれを考慮に入れるのであり、対象を知ることが望まず、それを知っているかぎりですれを無視し、それを無視するかぎりですれを知っている、そして私たちの表向きの行為や認識の根底に位置するものである」(S, 291/(2)134-135)。そうした両義的な知覚、あいまいな知覚こそが、顔と顔のあいだからひとつの表情を描き出し、身ぶりと言葉の周縁からひとつの感情をとらえ、言葉と言葉の端からひとつの思考を読み取る。このように意味があふれてくるのは、諸身体の端においてである<sup>7</sup>。

#### 5. 結論

ここまで私たちは、『シーニュ』の言葉をとおして、メルロ＝ポンティにおける他者の問題を考えてきた。他者という存在は、身体と身体自身への関係からあらわれて、それも自己と同じでありつつも異なるものとしてあらわれる。このように他人であるような自分自身を見出すとき、友情や

愛やおそれといった意味が感じられるのであり、そうした意味は、言葉や顔の端に、そして身ぶりの端に湧き出してくる。

諸身体のあいだ、諸身体の端というこの考え方は、間身体性という概念に通じており、メルロ＝ポンティの晩年の思想につながっていく。先に見たように、「哲学者とその影」という論文では、私の右手と私の左手の関係について分析がおこなわれていたが、それだけでなく、私の手と他人の手の関係についても論じられている。「もし私が他人の手を握りながら、その人がそこにいることについての明証性をもつとすれば、それは、その人の手が私の手と入れ替わるからであり、私の身体が、逆説的にも私の身体にその座があるような「一種の反省」のなかで、他人の身体を併合するからである。私の二本の手が〔フッサールの言葉でいえば〕「ともに現前し」、「ともに存在し」ているのは、それらがただひとつの身体の手だからである。他人はこの共現前の延長によってあらわれ、他人と私は、いわばただひとつの間身体性の諸器官なのである」(S, 212-213/(2)17-18)。

私の右手と私の左手が、同じひとつの身体の手であるのと同じように、私の身体と他人の身体は、同じひとつの間身体性の身体である。また、ひとつの身体においてずれが生じ、私の左手が感じられるものから感じるものに転換しうると同じように、ひとつの間身体性においてずれが生じ、私の身体は感じられるものから感じるものに転換しうると同じように、この魔術的ともいえる転換が起きるとき、他者というものが生まれてくるし、それとまさに同じ瞬間に、自己というものが生まれてくる。このように、他人や私という存在を根底で支えているのは、身体と身体のあいだであり、間身体性というレベルである。ここに見られる間身体性の概念は、『シーニュ』においてあらわれるだけではなく、未完に終わった著作である『見えるものと見えないもの』においても登場することになる。そこで間身体性という言葉は、肉の概念を検討するさいに使用されるとともに、可逆性の概念にも結びつけられるだろう<sup>8</sup>。

## 注

<sup>1</sup> Maurice Merleau-Ponty, *Signes*, Gallimard, 1960. 『シーニュ1』, 竹内芳郎監訳, みすず書房, 1969年, 『シーニュ2』, 竹内芳郎監訳, みすず書房, 1970年。以下, S と略し, 原著頁/(邦訳巻)邦訳頁を記す。

<sup>2</sup> Maurice Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, 1945, p. 413. 『知覚の現象学2』, 竹内芳郎ほか訳, みすず書房, 1974年, 228頁。

<sup>3</sup> 厳密に言えば、身体的間主観性という視点から見れば同じであるし、論理的客観性という視点から見れば異なる(S, 218/(2)24)。また別のところでメルロ＝ポンティは、他者は「私もまたともに参与しているただひとつの〈視覚(Vision)〉の起伏や偏差やヴァリエーションとしてそこにいる」(S, 22/(1)20)と表現している。

<sup>4</sup> こうした友情は、もしかするとサルトルとメルロ＝ポンティのあいだにもあったかもしれない。サルトルはメルロ＝ポンティについて、「彼のものを読むと、私には彼が私のために私の考えをあらわにして見せてくれるように思われた」と述べている。ジャン＝ポール・サルトル, 『シチュアション IV』, 佐藤朔ほか訳, 人文書院, 1964年, 180頁。

<sup>5</sup> これは革命政治についてもいうことができる。革命は権力関係を転覆しようとするものだが、革命が生きているかぎり、やはり他人の問題を見出すだろう(S, 398/(2)258)。また投票という行為にしても、自分の確信が数多くの他人の意見のなかでのひとつの意見として数えられるという事態に同意しているのだから、自己と他人の関係という問題にかかわる。結局のところ政治的生活は、私たち人間が「他人の身になる」(S, 400/(2)259)からこそ営まれるわけである。

<sup>6</sup> ある神話を聞いて理解するということは、「明白な内容だけではなく、調子, 速さ, リズム, 繰

り返し」(S, 151/(1)194)を聞くということである。

<sup>7</sup> ある種のまなざしや態度表明や発言から、他人の性格が突然私たちに明らかになったり、他人の心が突然私たちに開かれたりするのほどのようにしてだろうか。フッサールによれば、それは直観によって明晰判明に分析するよりも以前に起こるのであって、いわば予感とか、肉眼で見ない予見とか、あいまいな、すなわち象徴的でしばしば把握不可能で空虚なあらかじめの把握であるという。エトムント・フッサール、『イデー2-2』、立松弘孝、榊原哲也訳、みすず書房、2009年、119頁。

<sup>8</sup> Maurice Merleau-Ponty, *Le visible et l'invisible*, Gallimard, 1964, p. 185, 188. 『見えるものと見えないもの』、滝浦静雄、木田元訳、みすず書房、1989年、195-196, 198頁。